平成 18 年 10 月 21 日

（財）倶進会　2006 年度　第 75 回セミナー

「グローバル化の中の日本経済」

香西泰氏の講演をお聴きした。19 世紀から 21 世紀にかけてのグローバリゼーションが各国に及ぼす影響について、幅広く考察され、非常に参考になった。講演要旨を以下に示す。

（1）　グローバリゼーションの段階：19 世紀のグローバリゼーション（大航海時代、植民地支配、移民など）から保護主義の台頭（20 世紀前半の第 1 次世界大戦、恐慌、第 2 次世界大戦）を経て、20 世紀終わりの四半世紀の新しい形のグローバリゼーションへ

（2）　20 世紀末のグローバリゼーションのイメージ：冷戦（市場経済と社会主義経済との戦い）終了、ＩＴ革命（情報通信コストの著しい低下）、米国ヘゲモニー、反グローバリゼーション運動(ＷＴＯシアトル会議)など

（3）　21 世紀初頭（2000～2005 年）の成長マップ：中国（9.6%）、インド（6.9%）、南アジアの高成長、東・東南アジアの回復、アフリカの健闘（4～6%）、アングロサクソン（2.2～3.8%）や北欧（1.5～5.0%）など一部の好調な先進国、低成長のＥＵ（0.6～1.5%）と日本（1.3%）

成長率（2000～2005 年の平均）は世界で 2.8%、低所得国で 6.0%、中所得国で 5.1%、高所得国で 2.2%であり、グローバリゼーションで、南北格差は縮小したと言える。特に、人口の 40%を占める中国、インドの成長が目覚しく、これは情報通信コストの低下によるグローバリゼーションが大きく寄与している。米国のイノベーション（創造的破壊）が米国のヘゲモニーをもたらし米国がビジネス標準となった。それに対して、日本の「カイゼン」型のビジネスモデルには限界がある。今後の成長には新戦略が求められる。ＥＵの統合で金融は成功、成長率には失望と言う評価である。東アジア共同体は今後の課題である。中国の環境問題は、持続的成長の障害となる可能性がある。